〈研究ノート〉

保育者養成課程におけるピアノ指導

―こどもの表現活動を活性化させるピアノの活用とその指導法―

金　井　玲　子※

要約

ピアノという楽器は、保育の現場で子どもたちの表現活動を活性化させるものとして、実用の点でも表現能力の点でも圧倒的に優れており、活躍の場が多い。音楽の領域において保育士や幼稚園教諭に求められるものは、音楽の楽しさを伝えること、身の回りに聞こえてくる色々な音に敏感であること、子どもたちを見ながら生き生きとピアノを弾いたり歌ったりできることである。そのためには、まず音楽の楽しさを実感することが重要であり、多くの初心者が高いハードルに感じている読譜や両手での演奏に対しての苦労を軽減させること、そして、コードを利用して簡単に伴奏をつけたり、色々な感情や事象・動物などを即興的に表現できる力をつけることが大きな助けとなる。保育者養成課程におけるピアノ実技指導に際し、それらを最高に効率的に学ばせるためにはどうすればよいか、考察していく。

キーワード　音楽教育・保育者養成・ピアノ

目次

１．はじめに
２．音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの
　２．１　「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」の示すもの
　２．２　音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの
　２．３　ピアノに関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの
　２．４　保育の場におけるピアノの価値
３．養成校におけるピアノ実技指導
　３．１　音楽の楽しさを伝えるために、まずは音楽を楽しむ
　３．２　読譜の訓練
　３．３　ピアノと遊ぶ
　３．４　鍵盤を見ずに弾く
　３．５　生き生きと歌う
　３．６　子どもの表現活動を活性化させる即興性
４．おわりに

※浦和大学　こども学部

１．はじめに

2017年４月に浦和大学こども学部に着任し、保育士や幼稚園教諭を目指す学生たちのピアノの授業を担当して、前期の授業を一通り終えた。試行錯誤を繰り返しながらの３か月であったが、学生たちの様子をみていて最も強く感じたことは、何とかもう少し楽譜を読むことに対しての苦労を軽減させたいということである。保育者や幼稚園教諭を養成する課程において求められるピアノ教育とは何か、あらためて考え、授業の組み立て方についての考察をまとめてみたいと思う。

２．音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの

２．１　「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」の示すもの

平成29年３月に発表された文部科学省の幼稚園教育要領の「表現」の領域に関しては、次のように書かれている。[1]

表現

〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。〕

内容の（１）～（８）の項目の中で音楽に関連するのは、次のものであろう。

（１）生活の中で様々な音，形，色，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ。

（２）生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ，イメージを豊かにする。

（４）感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりなどする。

（６）音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

（８）自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

そして、この表現についての基本的な考え方は、厚生労働省の「保育所保育指針」[2]においても共有されている。

２．２　音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの

上記の「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」を整理してみると、音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるものは次の３点であろう。

（１）音楽の楽しさを伝えること

（２）身の回りに聞えてくる色々な音に敏感であること

（３）子どもたちを見ながら生き生きとピアノを弾いたり歌ったりできること

２．３　ピアノに関して保育士や幼稚園教諭に求められるもの

２．２の中でも、ピアノ実技に関する具体的な必要事項については、近藤が「保育者に必要とされるピアノ技術は、童謡の弾き歌いや伴奏実技（即興的伴奏・創作的伴奏・簡易伴奏）であろう」[3]とまとめている。これらを実現するためには何をすればよいのであろうか。

２．４　保育の場におけるピアノの価値

具体的な指導法に入る前に、そもそも保育の場で使用する楽器としてのピアノの位置づけを確認しておきたい。ピアノはギターやハープと同様、メロディだけでなく和音を奏することができる数少ない楽器である。子どもたちの歌の伴奏をするには、和音が弾けない楽器では難しい。音楽に合わせて身体を動かす遊びや、紙芝居・劇などに伴う音楽を演奏するに際し、音量や音域の広さ、そしてリズミカルな生き生きとした音楽を奏でられる音質の点で、つまり楽器の持つ表現能力を考えると、ピアノは圧倒的に優位である。

表現能力に伴い、広い音域に決まった高さの音の出る鍵盤が並び、自由に組み合わせて弾ける点は、学習の手段として音楽を理解するにも非常に役立つものである。従って、保育園や幼稚園においてもピアノを使用することが一般的であり、保育士や幼稚園教諭を目指すものは、ピアノを弾くことを要求されることが多い。しかし、その表現能力の高さは裏を返せば、演奏することの難しさと一体である。ト音記号とヘ音記号という２種類の楽譜を同時に読みながら両手で演奏するということは、大半がピアノの初心者である学生たちにとっては、至難の業であることは容易に想像がつく。しかし楽譜が読めない、ピアノを弾くことが難しいという気持ちに捉われていると、本来大切な、子どもたちに音楽の楽しさを伝えることはできないであろう。

３．養成校におけるピアノ実技指導

ここでは、２－２に示した音楽の領域に関して保育士や幼稚園教諭に求められるものの内、ピアノの授業において取り入れたい（１）と（３）の項目について詳しく述べていく。

（１）音楽の楽しさを伝える
（２）身の回りに聞えてくる色々な音に敏感である
（３）子どもたちを見ながら生き生きとピアノを弾いたり歌ったりできること

３．１　音楽の楽しさを伝えるために、まずは音楽を楽しむ

音楽の楽しさを伝えるために、先ずは保育者自身が音楽を楽しむことが必要であろう。つまり養成校の授業において、学生たち自身に、ピアノを含めた音楽そのものの楽しさを知り、体験してもらうことである。では、音楽の楽しさはどのような時に実感できるのか。筆者自身の音楽体験及びピアノ個人指導の経験から考えて、アンサンブルが一つの重要な要素であると確信している。

もう一つは、生き生きとした拍感を持つ音楽に接すること。０歳児から参加できるコン

サートで演奏した折に、ゆったりとしたテンポの美しい曲は、大人たちには聴いてもらえるが子どもはなかなか集中できない。それが、ミッキーマウスマーチのような元気な２拍子の音楽が聞こえた途端に、子どもたちは目を輝かせ、身体を動かしたり、手をたたいたりという行動を始める。この、アンサンブルと生き生きとした拍感という二つの要素を同時に体験できるものとして、私は、皆が知っていて子どもたちも大好きな「小さな世界」を４人４手に、「チョップスティック」を６人６手連弾に編曲し（図１、２）、授業及びピアノに関してほぼ初心者ばかりの参加者を対象にしたあるワークショップ[4]で取り入れてみた。

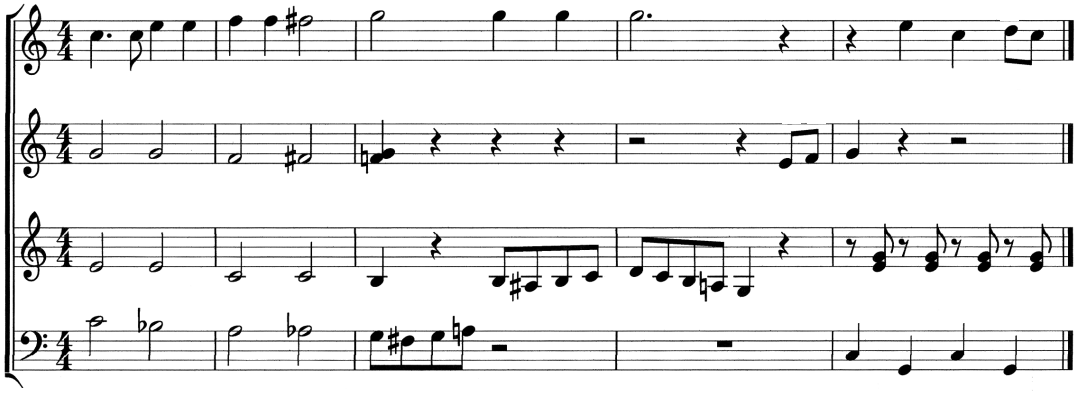

図１　小さな世界４人４手（筆者作成）

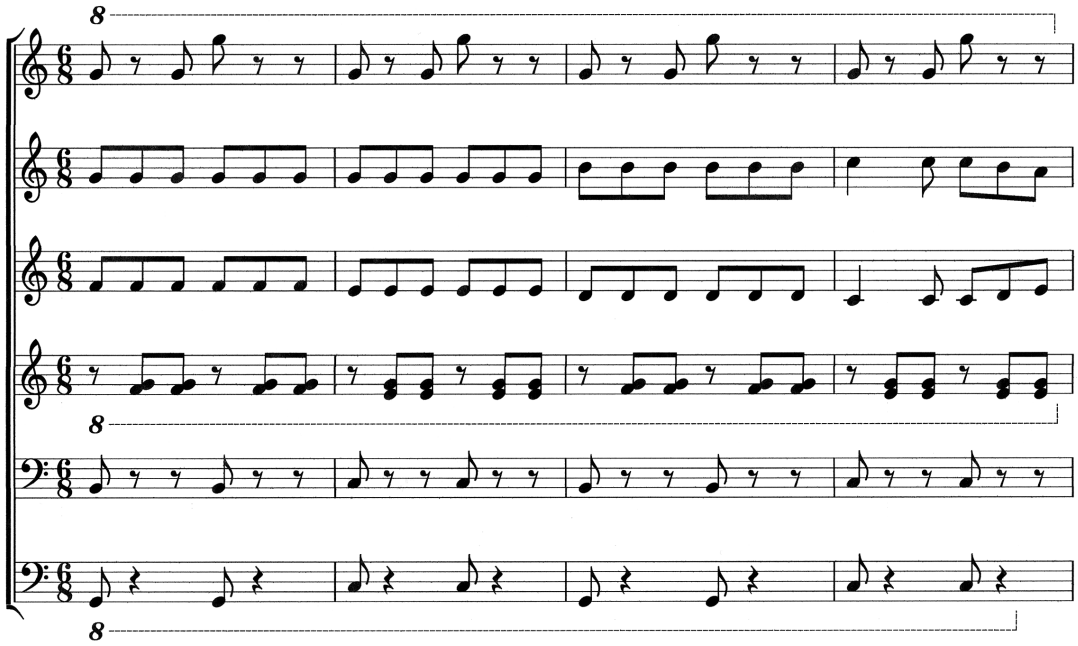

図２　チョップ　スティック　６人６手（筆者作成）

通常、連弾といえば１台のピアノを２人で演奏するものが一般的であるが、特にチョップスティックのほうは６つのパートに分けているため、極端に言えば１本指でも弾けるくらい、それぞれのパートがシンプルで、初心者でも、楽譜が読めなくても容易に弾くことができる。加えてなるべく多くの学生が一緒に演奏できるほうが楽しいと思い、４人４手と６人６手にしてみた。

最近は３人６手連弾や４人８手連弾の曲集等の出版も増えてきているが、子ども向けのものでも、ピアノの全くの初心者にとってはすぐに弾けるようなものではないのが現状である。実際に演奏する際には、バスのパートを担当している人が生き生きと演奏すると音楽が見事に生きたものになるということを併せて実感してもらうように心がけた。音楽の楽しさの根源である拍感を知り、感じてもらうためである。

前述したワークショップにおいて、ピアノをほとんど触ったことがなく楽譜も読めない参加者たちは、緊張して恐る恐るピアノの周りに集まっていたが、音が鳴っていくうちに次第に表情が柔らかくなり、最後に１曲を通すことができたときは、とても楽しそうな表情になっていた。

３．２　読譜の訓練

楽しめるためのもう一つの大切なポイントは、憂鬱になる要素、即ちピアノを弾くことや読譜に対する問題を取り除くことにあると考える。筆者は浦和大学でのクラス授業は僅か３か月しか行っていないが、37年間のピアノ個人レッスン及び、22年にわたる音楽大学での副科ピアノ実技指導[5]において、似たような問題に取り組んできた。読譜で障害になることは、概ね次のようなことで、それぞれについての指導のポイントは矢印以下のように考える。

①音の上行形はわかっているが、下行形はわかっていない（ドレミファソラシドは言えるのに、反対のドシラソファミレドは言えない）→ドシラソファミレドの早口ことば

②数えれば何とか音符が読めるが、瞬間的には読めない→ト音記号とヘ音記号の第３線の音を憶えさせる、もしくは、大譜表においてドの音が対照的な位置にあることを認識させる（図３、４）。

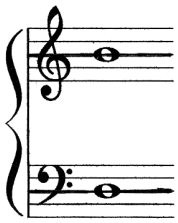

図３　第３線の音

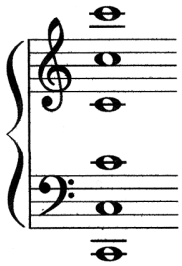

図４　大譜表の「ド」の音一覧

インターネット上で入手できる読譜アプリもいくつかあるが、バスティンの読譜アプリ[6]は楽しくゲーム感覚で読譜の訓練ができるものであると思う。

③一つの音符は読めても、和音のように複数の音を同時に読めない→線の音と間の音、及び音程関係の意識を持たせる（図５～７）。[7]

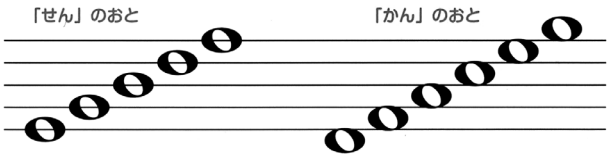

図５　せんとかんの音

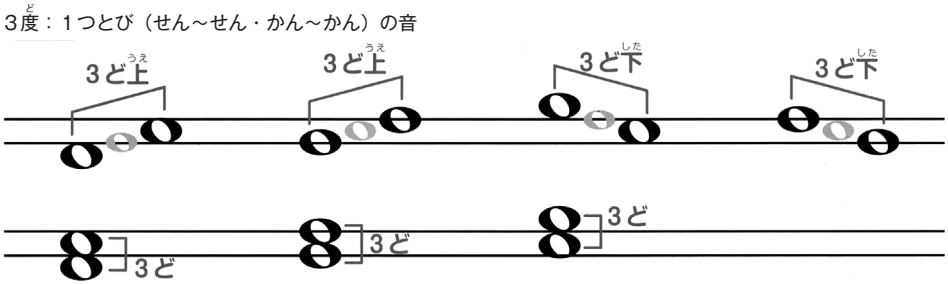

図６　３度

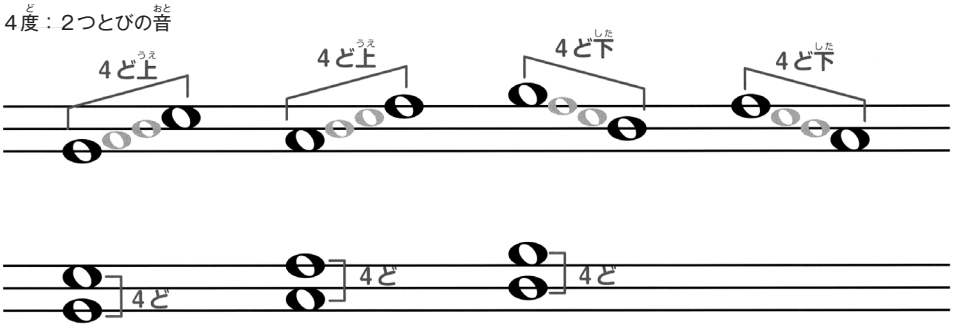

図７　４度

これら読譜のハードルは、初心者にとってとても高いものであるが、それを克服できたとしても、さらに実際に演奏するとなると、

④指番号を見ても、その指に直ちに命令がいかない→指番号カードでの練習

（例）　1　2　1　2　　2　3　2　3　　1　3　2　4

⑤指番号と音という二つの情報を同時に処理するのが難しい → 指番号＋音符のカードを用いて練習

⑥片手別では弾けても、両手で弾くことが難しい → 部分的に両手にする。

次に挙げる例は、「あめふりくまのこ」の歌の最初の４小節である（図８）。１・３小節は

左手も動きがあり、しかも跳躍があってなかなか難しい。片手別で弾けるようになって、両手で弾こうとするときに、一度にすべての音を弾かずに、Aのように先ずは１・３小節のバスの音だけを弾いてみると、さほどハードルは高くなく（つまりストレスなく）弾けて、しかも、音楽の骨格を理解することができ一石二鳥である。

それに慣れたら、次にBのように、２・４小節のバスの音も入れてみる。跳躍が難しければ、Aのあとに、左手は１・３小節休みで、２・４小節のバスだけを弾くCというステップを加えると、よりストレスが少ないであろう。

バスの音を入れることに充分慣れたら、いよいよ左手の音を全部弾いてみる。又、この左手のパートを弾くことがどうしても難しい場合は、Dのように、バスのラインで伴奏することも一つの方法である。

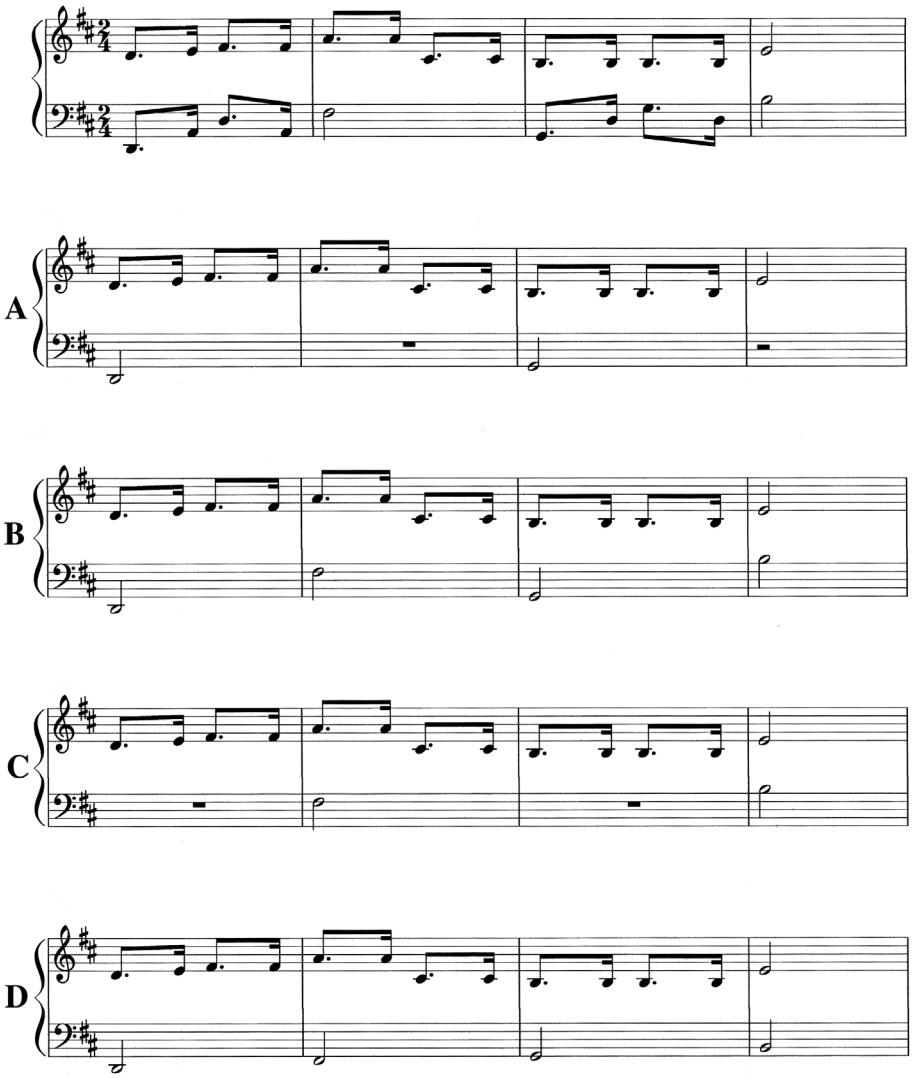

図８　あめふりくまのこ（A ～ D筆者作成）

片手から両手に移行する際のつまずきは、音楽大学や自宅でのピアノ個人指導においてもしばしば見受けられ、この方法は非常に有効である。

⑦リズムがわからない → 保育の場で使用する基本的な歌のレパートリーを効率的に学ばせる。

１例を挙げると、「おべんとう」の１小節目のリズムが、どうしても「ゆき」の１小節目のリズムになってしまう学生に、「かたつむり」のリズムと同じ！と説明した途端に正しく弾けたりする（図９）。不思議なことに同じ問題があり、同じように解決した学生が複数居た。学生たちになるべく直観的に理解できる方法で、効率的にリズム教育とレパートリーづくりを同時にできればと考えている。

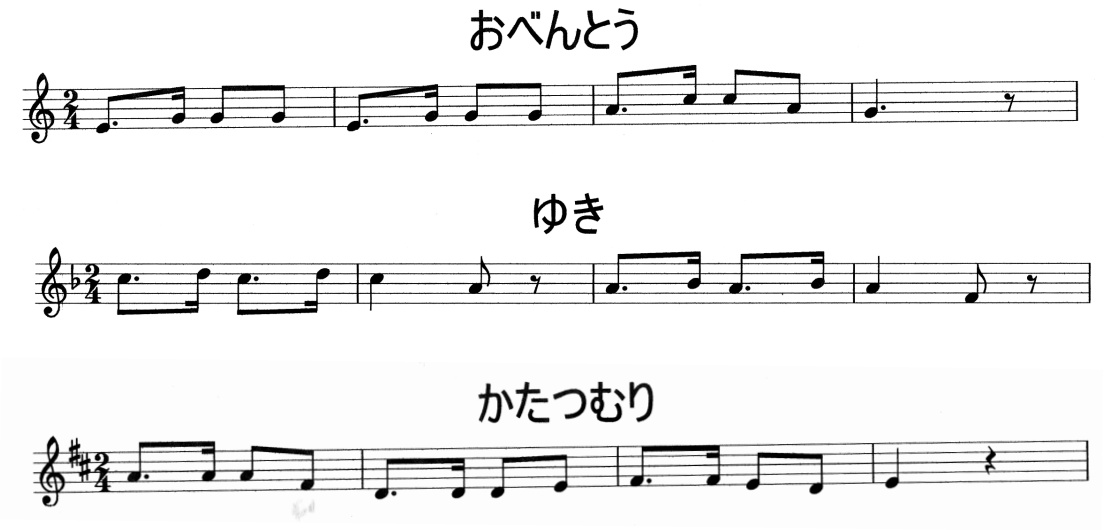

図９　リズムの比較

又、次の例は、「こぶたぬきつねこ」の連弾のパートの一部である（図10）。[8]

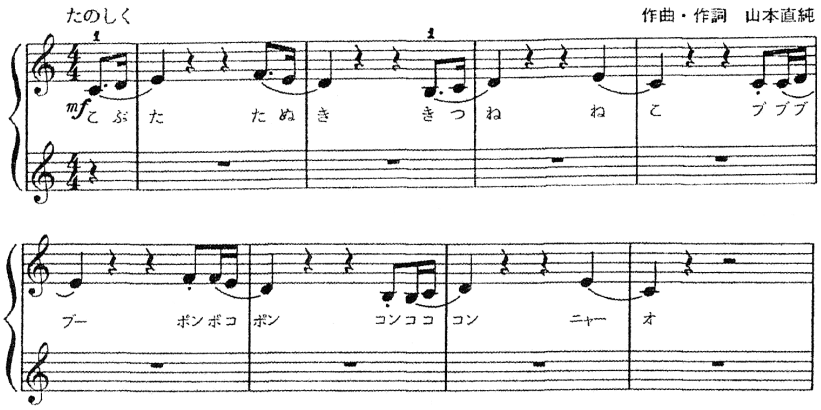

図10　こぶたぬきつねこ

この曲を連弾で遊べば、下記の２つのリズムは直ちに覚えられるであろう（図11）。

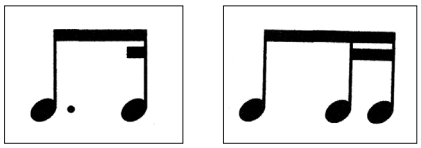

図11　２つのリズム

⑧音符の相対的な長さを知っていても、拍が流れている中で音符の長さを感じるという認識がない → 簡単な初見の問題を与え、必ず１又は２小節分、拍を声に出して数え、その流れにのって演奏する練習をする。

次の４分の２拍子の曲は、「いち、に、いち、に」と言ってから弾く（図12）。

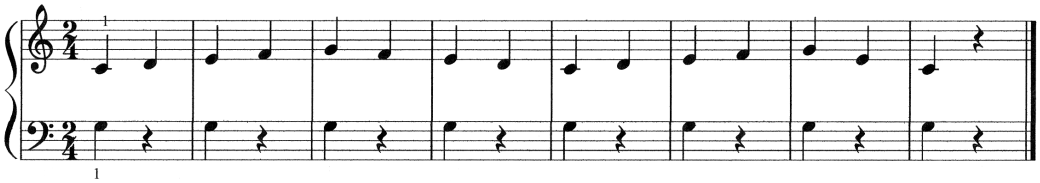

図12　初見課題１（筆者作成）

４分の３拍子の曲の場合は、「いち、に、さん」と言って弾き始める（図13）。

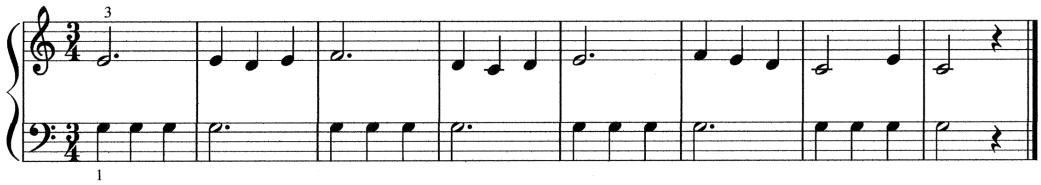

図13　初見課題２（筆者作成）

単純なことのようであるが、この練習も大変効果がある。４分音符２つで２分音符１つ分と知っていることと、拍の流れている中で４分音符を１拍、２分音符を２拍と感じることは全く違うと言っても過言ではない。初心者が往々にしてつまずくポイントである。筆者は小さい子どもに対しても、「ハ長調　４分の２拍子　いち、に、いち、に」のように、調性と拍子を言い、拍を声に出して数えてから弾くことを促している。この練習を数回繰り返すだけで、子どもでも自ら調性や拍子・拍を言ってから弾く習慣がつく。その習慣を先ずつけて、流れている拍の中でリズムを感じる訓練が大切である。

一言で読譜と言っても、調性・拍子・音の高さ・長さ・曲想に至るまで、多くの要素があるが、よく陥りやすい問題点は、音の高さと、せいぜい長さしか意識しないことである。初心者にとって、音の高さと長さを理解するだけでも大問題ではあるが、広い意味で読譜力をつけるために最も総合的で効果的なのは、初見の訓練であると考える。

３．３　ピアノと遊ぶ

読譜を徹底させる必要を痛感すると同時に、もう一つ楽しめるためのポイントは、逆に、楽譜に捉われずにピアノと向き合わせることではないかと思う。次のセクションの即興にも関連があるが、学生自身が、ピアノという一つの楽器に対して興味を持ち、ピアノで遊ぶ感覚を持つことが重要である。

最初のピアノの授業の際にピアノと友達になれるように心がけたい。具体的には、ピアノの中を覗き、音を出す仕組みを知り、何の楽譜も用いずに、どのような音が出せるのか、鍵盤の端から端まで使い、思い思いに試す時間を作る。これは、後述の即興演奏の入り口でもある。ダンパーペダルを踏んで音の響きを保ったり、ゲンコツや前腕を使ったりグリッサンド（glissando:離れた２音間を急速に滑らせるように奏すること）をしたり（図14）、無音で抑えた和音を他の鍵盤で強く弾くことによって倍音を響かせて鳴らすこと（図15）[9]なども試してみると面白い。

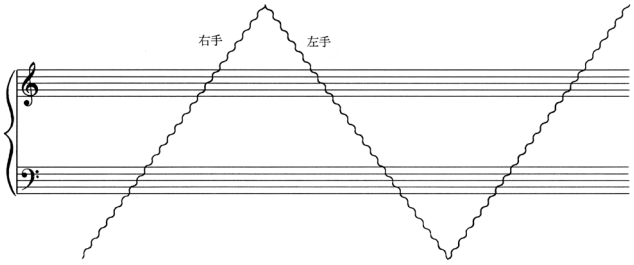

図14　グリッサンドの遊び

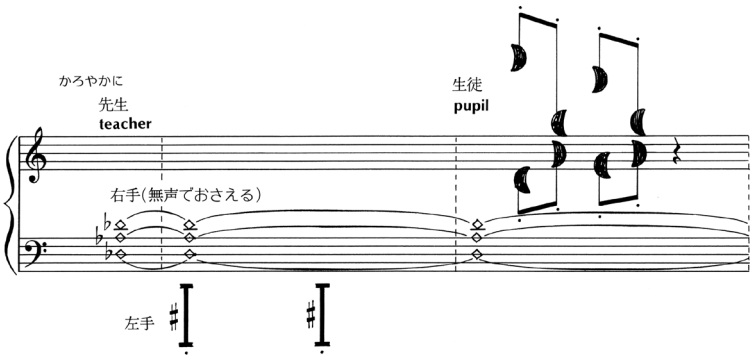

図15　倍音を聴く遊び

３．４　鍵盤を見ずに弾く

子どもの前で弾き歌いをする時、又、子どもの歌の伴奏をするときに大切なことは、子どもを見ながら弾くということである。先生が楽譜や鍵盤にかじりついて弾いていたら、子どもたちは歌うどころか、たちまち好き勝手な行動を始めてしまうだろう。パソコンのブラインドタッチのように、ある程度、鍵盤を見ずに弾けることが必要である。３．２で述べた指

番号カードの練習はその助けになるであろう。又、簡易伴奏のための主要三和音を、手のポジションを変えずに鍵盤を見ずに弾く練習も、大変効果的だと思う（図16）。

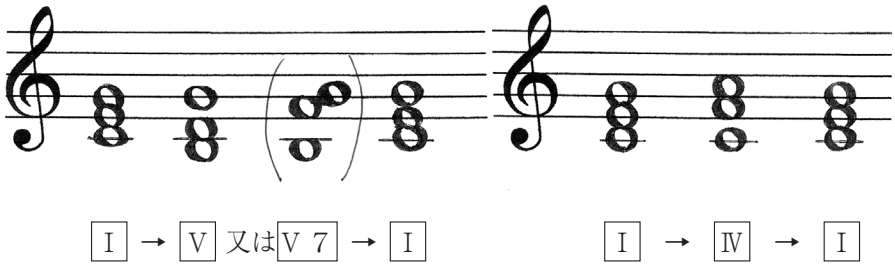

図16　主要三和音の練習（筆者作成）

3．5　生き生きと歌う

子どもの前で弾き歌いをする時には、大きな声で生き生きと歌うことが重要である。この訓練に、筆者は、『うたとピアノの絵本』[10]がとても有効であると思う。子ども向けの導入ピアノ教材のひとつであるが、楽譜いっぱいに描かれているかわいい絵（図17）が、子どもの想像力・表現力をかきたてる点で大変素晴らしい。この楽譜を見て子どもたちが、自発的に絵の説明をしてくれたり、物語を考えて話し始めたりする場面がよく見受けられる。別売りのCDの音楽がまた楽しい。人前で歌うことに慣れること、ピアノ演奏の導入と読譜の訓練も兼ね備え、且つ、子どもの表現の世界を垣間見させてくれる貴重な教材である。

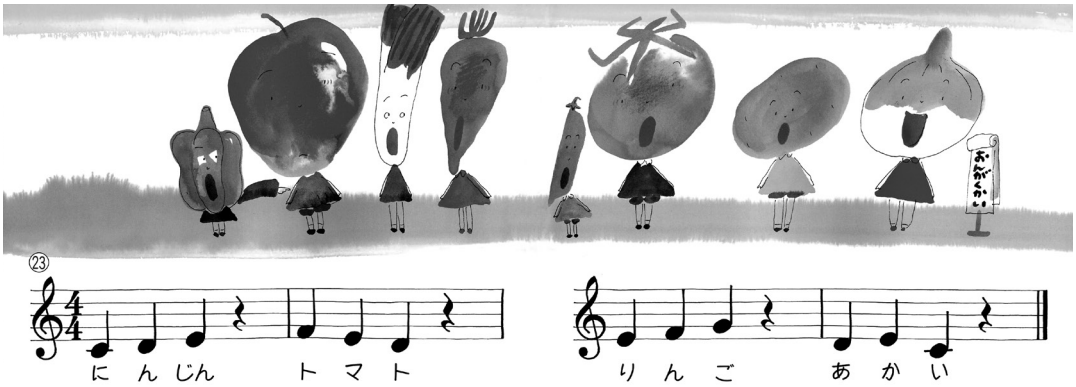

図17　『うたとピアノの絵本 ① みぎて』より第23番

3．6　子どもの表現活動を助ける即興性

子どもは動物の真似が大好きである。幼児を対象としたピアノの個人レッスンの際に、ピアノで色々な動物のイメージのフレーズを弾くと、キャッキャと喜んでその動物の真似を始める。レッスンの中で最も人気のあるメニューである。しかし、それをピアノ初心者の学生たちにいきなりやらせることは不可能である。即興というものは、その場で作って弾くもの

ではあるが、そもそも引き出しが無ければ難しい。下記に、子どもの表現活動を活性化させるために出版されている２つの教材[11]から、それぞれ“ことり”と“うさぎ”を表現したフレーズの例を挙げる（図18、19）。筆者は学生たちに、保育の場における基本的な歌のレパートリーに加えて、子どもたちの表現活動を支える即興の引き出しを携えて卒業してほしいと考えている。

ことり１

ことり２

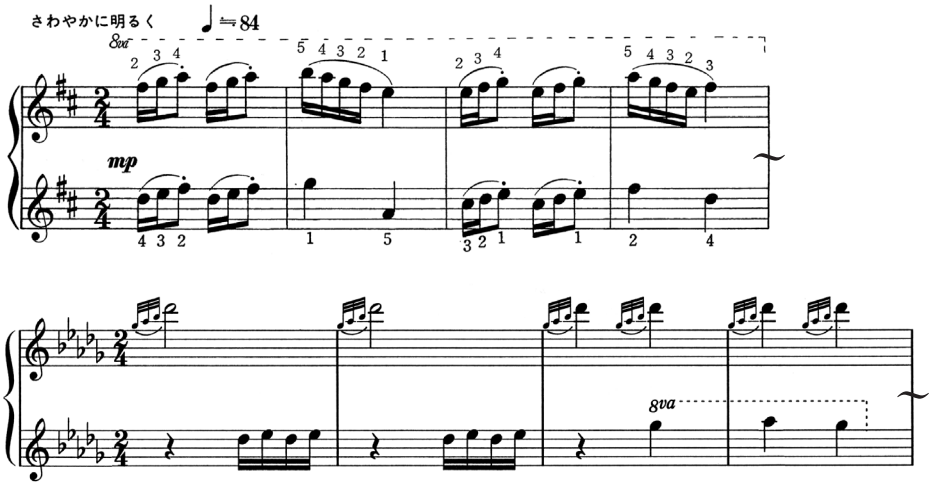

図18

うさぎ１

うさぎ２

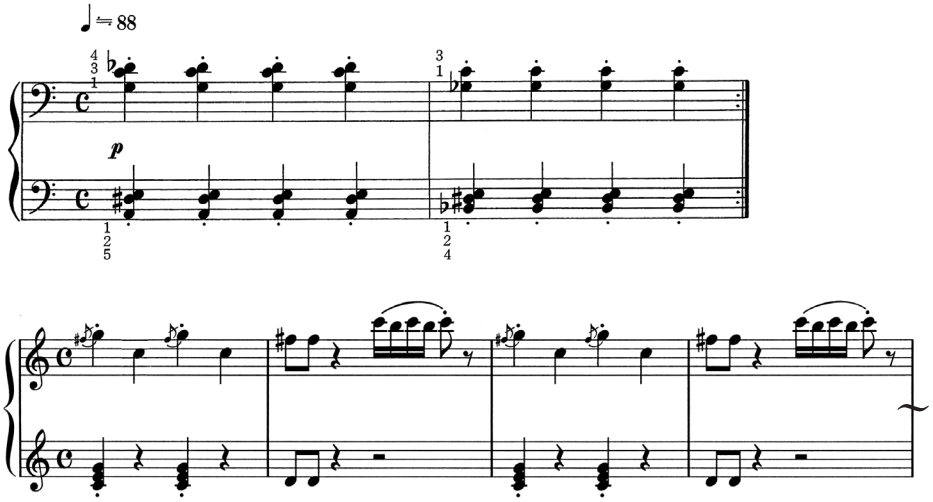

図19

４．おわりに

保育者養成課程においてのピアノ授業を始めて３か月、自分なりに、37年に及ぶこれまでのピアノ指導者としての経験を集約して行ってきた。初心者がピアノを弾けるようになるための過程や、それに必要なことは基本的に変わらない。しかし、それにプラスして、保育者

養成課程に求められる内容を盛り込み、しかも完全な個人レッスンとは違う、限られた時間内でクラスを対象に行うという点に難しさがある。その一つ一つのハードルを工夫しながら乗り越えて授業をすることは楽しみであり、学生一人一人がピアノを弾くことを楽しみ自信を持って卒業してもらえるようにと願っている。

引用文献・注

1　文部科学省幼稚園教育要領（2017）p.17
2　厚生労働省保育所保育指針（2017）p.31～34
3　近藤久美（2002）「保育者養成校におけるピアノ指導教員の資質について」『第56回日本保育学会発表論文集』p.132
4　2017年６月10日に行われた浦和大学オープンキャンパスのワークショップ「ピアノで遊ぼう！連弾でアンサンブル体験」
5　1995年より現在まで、東邦音楽大学において、ピアノの主専攻と併せ副科ピアノの実技指導も行っている。
6　バスティン・ピアノメソッド（アメリカのジェーン＆ジェームス・バスティン夫妻により体系づくられた代表的なピアノメソッドの１つ）から出ている読譜訓練のための音符カード（バスティン・ピアノフラッシュカード）のアプリ版。
7　田村智子『わかーるピアノ』2016　全音楽譜出版社　p.17、p.20
8　池田恭子　編『たのしい６手連弾ピアノ曲集１』 2005　株式会社ドレミ楽譜出版社　p.14
9　加勢るり子 監修　加勢園子 編著『ピアノはうたう・１』 1987　音楽之友社　p.22　左手は前腕で、生徒の三日月印はげんこつで弾く。
10　呉　暁『うたとピアノの絵本』 1989　音楽之友社　p.26、p.27
11　教材１　吉野幸男　執筆・編集代表 『表現のためのやさしいピアノ即興演奏』 2014　株式会社ドレミ楽譜出版社　p.64
教材２　江口寿子　著『音楽とあそぼう ２』イメージ聴音ワークブック　1983　共同音楽出版社　p.82、p.84

参考文献リスト

［１］文部科学省幼稚園教育要領（2017）
［２］厚生労働省保育所保育指針（2017）
［３］近藤久美（2002）「保育者養成校におけるピアノ指導教員の資質について」『第56回日本保育学会発表論文集』
［４］田村智子『わかーるピアノ』2016　全音楽譜出版社
［５］江口寿子　著『音楽とあそぼう ２』イメージ聴音ワークブック　1983　共同音楽出版社
［６］吉野幸男　執筆・編集代表『表現のためのやさしいピアノ即興演奏』2014　株式会社ドレミ楽譜出版社
［７］池田恭子　編『たのしい６手連弾ピアノ曲集１』2005　株式会社ドレミ楽譜出版社
［８］呉　暁『うたとピアノの絵本』1989　音楽之友社
［９］大畑祥子　編著『保育内容　音楽表現』1991　建帛社

［10］小川宜子・木許　隆・妹尾美智子　監修・編著『子どもの表現活動に役立つピアノテクニック』2009　圭文社
［11］小川宜子・木許　隆・妹尾美智子　監修・編著『子どもの表現活動を導くコードネームによる伴奏法』2010　圭文社
［12］奥千恵子　『保育者養成と演奏技法（Ⅲ）―保育指導としてのピアノ導入教材についての試み―』四天王寺大学紀要2014 第58号

Summary

Piano Teaching in a Childcare Worker Training Course:
Use of the piano for stimulating children's expressive activities

Reiko Kanai

The piano as a musical instrument is extremely superior from the perspectives of practical use and expressive capacity. It can be useful in many settings in helping children's expressive activities during childcare practice. In music education, childcare workers and kindergarten teachers are expected to convey the joy of music, be sensitive to various sounds they hear from their surroundings, and to play the piano and sing enthusiastically while maintaining eye contact with the children. To do so, it is essential for them to actually feel the joy of music. It would be very helpful if we can lessen the burdens of reading music and playing the piano with both hands simultaneously, an obstacle that many novices find hard to overcome. Furthermore, it is beneficial that we help them acquire the ability to provide piano accompaniment easily using codes and express various emotions or depict events, animals, among others, through improvisation. Therefore, this study examined what can be done to help students learn these aspects most efficiently during practical piano training in childcare training schools.

Keywords Music education, cultivation of childcare workers, piano

（2017年11月16日受領）